

## 「やまぐちスタディーズ」構築に向けた試み —2007年度における教育実践—

Towards the Establishment of a Yamaguchi Studies Program

—A pilot course in the 2007 school year—

岩野雅子  
シャルコフ・ロバート  
加藤禎行

### 1. 本学における国際化推進と「やまぐちスタディーズ」

1983（昭和58）年に当時の中曽根首相によって提唱された「留学生10万人計画」は、2003（平成15）年にその目的を達成し、2007（平成19）年には安部内閣時代に官邸主導で打ち出された「アジアゲートウェイ構想」など、持続的に留学生施策はアップデートされている。派遣にせよ、受け入れにせよ、留学生交流は大学教育の国際戦略の一つに位置づけられ、国際的な人的交流が血液となって大学を巡り、教育研究を活性化させ、国際的競争に耐える力をつけるとされている。大学学長のもとに国際戦略を企画立案する部署を創設せよ、という近年の上からの教育改革の動きは、ここ数年その力を強めていくものと考えられる。留学生施策に関する教育行政的な側面はさておき、教育の質の向上という観点から、留学生にとって魅力ある教育内容を本学の規模と特性を生かした形で実現できる道はないか。これが「やまぐちスタディーズ」構想の始まりとなっている。

ところで、これまで留学生を対象とした日本事情や日本文化に関する科目は、「外国人のための日本語」の一環として広く提供されており、また、英語のみで行なう授業科目群の中でも、魅力あるものとして定着している。しかしながら、留学生と日本人学生が肩を並べて日本文化を学び、日本社会について語り、共に地域に出て実際にフィールドワークを行ないながら共感を深めていけるような授業はまだ少ない。

「やまぐちスタディーズ」構想は、2007（平成19）年3月に国際化推進室（当時：下笠徳次室長）が2007（平成19）年度文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム」に応募し、助成金獲得には至らなかったが、新規性ならびに獨創性があるとされ、継続的な努力を求められたプロジェクトである。新規性とは留学生と日本人学生の共感を重視する点にあり、獨自性とは日英バイリンガルによる学び合いのプロセスにある。本稿では、2007（平成19）年4月以来、9ヶ月にわたるその後の試みについて中間報告を行い、次へのステップを探る一助ともしたい。なお、上記の文部科学省プログラムについては、2008（平成20）年度は「大学教育の国際化加速プログラム」として公募が行なわれることが発表されており、各大学における国際交流への意識やレベルが高まっていることが予想される。

「やまぐちスタディーズ」構想の目的は、以下に掲げる通りである。やまぐち地域の文化遺産を一方的に講義するだけでなく、日本語から英語へ、英語から日本語へと相互交通させながら、翻訳の過程において発掘される視点を、専門スタッフや地域の人々と分かち合う。さらに異文化交流を促進しつつ新しい文化的意味付けを行い、地域社会に発信していく。ここでいう地域とは、学生たちが足を運んだローカルコミュニティも、留学生が帰国していき、日本人学生が出て行くグローバルコミュニティも含む。この学びのプロセスにおいて、海外から来日する留学生は受動的に日本文化や日本社会について学ぶだけの存在ではなくなる。教員やスタッフ、地域の人々は、教え慣れた、あるいは見慣れた文化的存在について、予想外の疑問を投げかけられる。そして日本文化や日本社会という領域を、

国際文化という大きなコンテクストに再配置することで、人と文化へのアプローチの新しい方法を見出すことを目指してゆく。

「やまぐちスタディーズ」構想は、やまぐちの文化遺産や歴史遺産からいくつかの題材やテーマを取り上げ、ゼミ形式で学習を行なうプロセスを創ろうと試みる。初年度となる2007（平成19）年度はまず、〈やまぐちの文学〉を取り上げた。文学作品成立の背景となった文化的背景や地域的特性を足で辿り、日本語と英語で語り、質問をし、そこから生じた多様な視点を地域の人々に返していった。筆者もまた、本項以降に提示されることになる、本年度の「やまぐちスタディーズ」の各テーマの文化的背景となる教材を学生たちと読み、議論することを分担した。具体的には、筆者の担当授業において、日本のコミュニケーションと感情表現、家制度やウチソトの概念、親子関係や子育て、季節や慣習、上京や帰省等について取り上げた。また日本語で作品を発表し、2001（平成13）年2月、第6回中原中也賞を『釣り上げては』で受賞した、アーサー・ビナード氏の言語に向かう態度についても議論を重ねた。

今年度の試みから得られた成果や課題を踏まえて、将来的には題材やテーマをより豊富にし、教育方法の改善を図りたい。教材としては、山口に根ざした自然や建築物、歴史や政治や芸術文化、生活文化を組み込む余地があるだろうし、また教育メソッドの充実という点では、通訳・翻訳技術の向上、複数言語によるフィールドワーク記録の取り方や報告方法、複数言語が交錯するゼミの運営方法などが含まれる。

その参考となる先進的事例として、本学と学術交流を締結している海外大学の地域研究がある。各大学は、例えばスペイン・ナバラ地方の歴史と文化（ナバラ州立大学）、カナダ・ケベックの文化遺産学習（ビショップス大学）、そしてアメリカ・ケンタッキーでのフィールドワーク（センター大学）など、地域独自の文化を継承し教授するプログラムがある。今後は、これらの姉妹大学からもノウハウを学びながら国際的な教育研究を進めることで、本学の教育の質を高めたい。同時に、本学の教育プログラムの充実には、海外大学にも魅力あるものとして発信できるだろう。留学生を大量に受け入れる他大学に追随するのではなく、本学の国際交流活動が長年にわたって培ってきた人的ネットワークと信頼をもとに、有限のリソースを生かしながら、前進していくことを模索しているところである。

本稿では、以下に教育プログラム「やまぐちスタディーズ」の概要、その試行的実施の結果、そこから見えてきた新たな課題について、実践者の立場から報告を行なう。前任者である下笠国際化推進室長から本プロジェクトを引き継いだ責任と重圧を大きく感じつつ、「英語による開講科目」責任者のシャルコフ准教授にプロジェクトリーダーを、日本近代文学を専攻する加藤講師にサブリーダーをお願いした。両氏によってもたらされた本年度の成果が、来年度以降、さらに確実な成果となることを願っている。

（この項、岩野雅子）

## 2. 「やまぐちスタディーズ」の背景

本項では、本学での「英語による開講科目」の将来像を検討するに当たり、その主たる受講者となる欧米出身の交換留学生にとって、より充実した教育プログラムを開発するうえで、そのカリキュラムの中核となる基幹科目設立構想（以下「やまぐちスタディーズ」と仮称する）とその実践について述べる。

「やまぐちスタディーズ」の主眼は、今現在の「英語による開講科目」群をより体系的なカリキュラムに整理することで、本学の教育プログラムにおける新機軸を打ち出すことにある。そしてその具体的な教育実践としては、欧米出身の留学生向けの授業において、滞在地ややまぐちの地域性を深く刻印した文化に関連する内容を取り上げ、これを通じてやまぐちの地域性・文化についての理解を深めさせ、留学生各自の故郷や文化と比較させつつ、最終的には地域遺産への普遍的な理解を促進するこ

とを目指す。こうした営為は、決して教室のみで展開されるものではなく、教室外での地域社会や文化を直接経験していくフィールドワークを通じて、留学生が地域の歴史、文化、人に対する敬意を育む機会となり、また本学の日本人学生、日本文化等に関する教員スタッフ、さらには地域住民が、相互交流によってたがいの異文化理解を深めあう教育プログラムに発展すると思われる。

ところで、欧米出身の交換留学生のために開発された「英語による開講科目」は、2000〈平成12〉年、本学がセンター大学（アメリカ）との学術交流協定を結び、同大学の交換留学生の受け入れを開始したことを契機として設置された。初年度は7科目のみの開講であったが、徐々に開講科目も充実し、現在では25科目が開講されている。これらには「茶道」「華道」などの体験学習的授業、「外国人のための日本語」といった初歩の日本語教育も含まれるが、専門科目としての講義科目もまた、16科目開講されている。

たしかに科目数の充実は達成されてきたが、「英語による開講科目」カリキュラム構成を一覧した場合、全体としての明確なコンセプトやメッセージ性に改善の余地があることが教育の質をめぐる課題として残されている。このため2006〈平成18〉年度以降、「英語による開講科目」担当教員を対象としたFDにおいて意見交換を開始し、何らかのかたちで、統一感のあるカリキュラムとして全体を再構成することを今後の重点課題とした。

そこで将来的な基幹科目候補のひとつとして、2007〈平成19〉年度、現行のカリキュラムにおいて、可能な範囲でシラバスを調整し、試行的に実践されたのが「やまぐちスタディーズ」であった。具体的には、オムニバス形式で開講される交換留学生向けの「日本文化論Ⅱb」から日本近代文学の枠（講義4回相当）を、〈やまぐちにおける大正・昭和戦前期文学〉という領域に変更し、授業プランを再構成した。本年度は、山口出身の詩人中原中也と小説家嘉村礒多のテキストを授業で取り上げ、そのうえで外部講師によるそれぞれの文学者についての授業と文学散歩を企画した。

本年度の取り組みにおけるの成果物は2つある。第一が「やまぐちスタディーズ」の教育プログラムの一部を開発し運用したこと、そして第二に、英訳が存在しなかった嘉村礒多「神前結婚」の英訳を作成したことである。これにより、「やまぐちスタディーズ」全体のサンプルとなるプログラム案を提示することが可能になり、また、嘉村礒多の英訳作成によって、さらなる日本文化に関する英訳教材作成作業の基盤を構築することができた。この翻訳作業は、すなわち異文化理解における文化の翻訳可能性と翻訳不可能性についての取り組みの連続であったが、こうした作業の積み重ねによって作成される英訳は、将来的な段階においては、本学および地域社会と国際社会とを結ぶ媒体となることが期待できる。

（この項、シャルコフ・ロバート）

### 3. 「やまぐちスタディーズ」の実践

2007〈平成19〉年度の「やまぐちスタディーズ」構想の実践において、日本近代文学領域を選び、とりわけ〈やまぐちにおける大正・昭和戦前期文学〉を重視したのは、以下の理由による。まず、中原中也生誕100年であった本年度は、山口市内で留学生が参加しうる中原中也に関連するイベントが複数予定されており、留学生のエクスカッション及びフィールドワークを試みるには最適であったこと、これらのイベントと関連して中原中也に関する外部講師を招聘することが容易だったこと、そして、同時期のやまぐち出身者でありながら中原中也とは異なった文学活動を展開した嘉村礒多の作品、およびその舞台となった残存する田園風景を直接経験することで、イメージばかりが先行しがちな現代日本社会・日本文化とは異なった、高度経済成長以前の日本社会につらなる光景を確認させたかったこと、などが挙げられる。

年度当初は、「英語による開講科目」担当者全員で現行のカリキュラムを分析し、現段階での問題点や課題を明らかにし、その後、新カリキュラムのビジョンを策定したうえで、平成18年度文部科学

省国際推進教育プログラムに外部資金を申請した計画を踏まえつつ、新カリキュラムの基幹科目のひとつとして構想中の「やまぐちスタディーズ」について意見交換を行い、これを承けてシャルコフが「英語による開講科目」の将来像を検討し、その原案を作成することを予定していた。

しかしながら実際には、「日本文化論Ⅱb」における日本近代文学の授業を、「やまぐちスタディーズ」に置き換える場合、具体的に何が可能かを検討した。というのも、教育プログラム案作成から実施までの期間が非常に短く、そして、英訳すべきテキストを選考し、その文化的背景を踏まえた翻訳には準備期間も必要だったからだ。そして何よりも、この教育プログラム開発に力を入れることで、カリキュラム全体の改革を提案する際、空疎な計画ではなく、具体的なプログラムの実施計画やその成果を示した方が他教員スタッフからの理解も得やすく、提案しやすかったと判断したからである。

この方向転換を承けて、岩野・シャルコフ・加藤の3名で、〈やまぐちにおける大正・昭和戦前期文学〉を題材とした授業運営案を意見交換し、まず本学教員と外部講師の担当、およびそれぞれの文学者に関する講義コマ数を決めた。中原中也に関しては詩人で中也研究者の佐々木幹郎氏に中原中也の生涯と詩についての講義を2コマ依頼し、そして嘉村礒多については本学の教員スタッフである加藤が2コマ担当することとした。この4コマに加えて、それぞれの文学者について半日の文学散歩を企画し、中原中也については講義と同様に佐々木氏に、礒多については郷土文学研究者の多田美千代氏に依頼した。それぞれの講義および文学散歩の通訳はシャルコフが担当し、中也や礒多の作品や生涯における文化的なテーマ（日本の家制度、婚礼など）については、岩野担当の「Intercultural Education in Japan」という「英語による開講科目」の一部を調整し、交換留学生に指導することとした。

中原中也に関するプログラムの内容については、佐々木氏と打ち合わせを重ねた結果、佐々木氏の希望により、講義受講予定の交換留学生5名に、2007（平成19）年10月8日、山口情報芸術センターで上演された佐々木幹郎氏監修「朗読劇 子守唄よ」という、中原中也についての劇を観賞させたうえで、本学で2コマの講義を受講させることとした。佐々木氏から提供を受けた脚本をシャルコフが英訳し、留学生に事前指導を行ってから、演劇鑑賞によって詩人の生涯を確認していたため、11月16日、本学で開講された佐々木氏の講義は、これを踏まえた中也の詩作品を中心にした学習となった。この講義においては、既に英訳された中也詩の朗読、さらには交換留学生による未翻訳の詩について翻訳の試みもあった。翌11月17日に実施された文学散歩は「中也と山口の自然」をモチーフとし、中也が幼少期に修養した鳴滝、中原家墓所、およびその近郊の吉敷川周辺となり、それぞれの場所に因んだ詩を朗読し、佐々木氏による解説を受けた。

嘉村礒多に関するプログラムの内容については、加藤が講義で取り上げる小説「神前結婚」を選定し、講義で取り上げるテーマなどを模索した。小説の英訳はシャルコフが中心となったが、昭和初年代の日本語表現、同時代的な歴史的事項や文化背景、複雑な構文などについては、加藤からの助言を承け作業を進めた。文学散歩は外部講師の多田氏と加藤とが連携して礒多の命日（11月30日）に実施し、私小説家であった礒多の生涯を、作品の舞台となった風景、建物、場所等で構成した。特に今回交換留学生が読んだ「神前結婚」に登場する嘉村礒多生家や妙見社は、文学散歩の重要な見どころであった。また仁保信行寺で同日開催された礒多を偲ぶ会に参加し、その朗読会で交換留学生、またこの文学散歩に参加した日本人学生が「神前結婚」の一部分を英語と日本語のそれぞれで朗読し、礒多や彼の作品に対する感想について、会の参加者である地域の方々と意見交換を行った。

これらの「やまぐちスタディーズ」を試行する過程で、いくつかの成果や課題が見えてきた。まず、非常にローカルなテーマでありながら、やまぐちの郷土文学が交換留学生にも日本人学生にも大変親しみやすく意義深いテーマであることが確認できた。今年度、取り上げた中也や礒多が、ともに似たような困難で短い生涯を送り、そこから恋愛という難題、夢を実現するための苦労、親の反対を押し切って天職に専念することなど、今の若者に通じる豊かなテーマを見出すことができた。さらに、作

品の舞台を実際に訪ね、そして外部講師や本学の教員スタッフからその土地の隠れた魅力を聞くことで、講義で学習した作品への理解がより深まっていたように思われる。また筆者もこの「やまぐちスタディーズ」の試行によって、やまぐちという場所の更なる魅力を感じた。留学生、本学教員スタッフ、外部講師、三者三様にやまぐちの大自然で行われた文学散歩を、非常に充実したものと評価している。

このように本年度作成した、嘉村礒多「神前結婚」英訳や、シナリオ「子守唄よ」英訳も、「やまぐちスタディーズ」の成果物である。将来的には完成させた「神前結婚」英訳を発表する予定だが、こうした教材を作成する過程で、両外部講師や本学教員スタッフ、また地域の方々や交換留学生との間に、新たな交流が生まれている。これらの交流の媒介者として、通訳はもちろん不可欠だったが、日本語のオリジナルの本文、「神前結婚」英訳の双方があったからこそ、この教育プログラム参加者がみな共通の基盤に立って議論できた。上記の英訳は、ひろく公表しうるだけの精度を上げていく必要がまだあるのだが、共通理解を形成する道具としては十分な役割を果たしたと考える。

(この項、シャルコフ・ロバート)

#### 4. 「やまぐちスタディーズ」のなかの〈日本近代文学〉

今年度の留学生向けの日本近代文学の授業では、やまぐちの文学者のなかから、昭和初年代にその特異な私小説で近代文学史に名を残し、新興芸術派に属した小説家嘉村礒多の「神前結婚」(『改造』1933〈昭和8〉年1月号)を教材として選定した。選定の最大の理由は、当初から本学近郊の文学散歩プランが要求されていたため、小説記述にそうした文学散歩に適切な情景が多く含まれているテキストであることが望ましかったからだ。また留学生向けの教材開発も期待されていたため、英訳教材を作成するうえで短篇小说であることも望ましかった。

従来から、留学生向けの日本近代文学に関するプログラムは、オムニバスによる講義の一部分を担うといった開講形式が選択されてきた。これは、授業担当者の外国語運用能力に起因して、通訳スタッフなしでは専門科目としての講義が成立せず、通訳スタッフのオーバーワークを回避する必要があるという事情、また、交換留学生の日本滞在が半年間と、複数の講義を継続的に積み重ねて発展的な段階に繋げていくには、短期的で、むしろヴァリエティのある日本文化の紹介を多方面から行う方が効果的であるという事情にもよる。

となると、いきおい日本の近代文学史を明治期から現在まで通史的に講義を行ったうえで、具体的な文学作品を鑑賞させるというアプローチを選択することは困難である。また、交換留学生の日本語運用能力では、多くの場合、日本語による文学テキストの享受も困難で、英訳された日本近代文学テキストを用いた講義を行わざるを得ない。そのため文体や表現といった言語そのものが提示する側面ではなく、言語の意味内容が提示する物語内容、およびそれに付随する歴史的・文化的コンテキストについての解説を中心とした講義を準備する必要がある。以下、本年度の「やまぐちスタディーズ」における筆者の取り組みを簡単に報告する。

なお、参考までに小説「神前結婚」の梗概を掲げておく。主人公の〈私〉は、かつて妻子を捨ててともに東京へと夜逃げした〈ユキ〉を連れて、八年振りに父母の家に正月の帰省をしていた。前妻との子〈松美〉を養育する父母は、一向に小説家として成功する兆しのない〈私〉と、〈筋道の通らん女〉である〈ユキ〉の帰郷が、村の人々に知られることを憚っている。そこへ〈私〉の小説が〈××雑誌〉に掲載されるという通知葉書が配達され、〈私〉と〈ユキ〉は狂喜する。東京で小説家として成功する見込みがなかなか得られなかった〈私〉は、当初、この帰省で〈ユキ〉を実家に預け、単身で上京しようとさえ考えていたのだ。再びふたりで上京することになった〈私〉と〈ユキ〉は、父母、〈松美〉とともに、実家近くの社を参詣する。そしてそこで父は、〈ユキ〉をまじえて、酒の杯を一同で交わすよう勧める。〈私〉はこの〈親子杯〉の趣向に、父への深い感謝を感じると同時に、〈私〉の脳裏は

何やら不吉な〈暗黒の塊〉で満たされてしまう。

この〈私〉という主人公が、生身の作家嘉村礒多をかたどって作り出された人物像であり、小説執筆にあたって依拠されている出来事は、礒多の小説「途上」が雑誌『中央公論』（1932〈昭和7〉年2月号）掲載決定との通知を、郷里の実家で受け取ったという、1932〈昭和7〉年1月の出来事であり、「神前結婚」は、礒多の生涯における伝記的な事項のなかでも、最も輝かしい場面を含んだ小説であると言えるだろう。

先に言及したように、教材とする小説選定にあたっては文学散歩への適合性が重視されていたのだが、実際に留学生とともに嘉村礒多の小説「神前結婚」を読み進めると、やまぐち近郊の田園風景についての詳細な叙述を含むといった地域性とは異なった位相で、いくつもの興味深い反応を得ることができた。そしてその反応に応答していく営為は、ややもすると自明視されがちな文脈に、改めて立ち止まる作業であり、同時に、日本近代文学という学問領域に親しんだ筆者にとっては、自己確認と言うべき営為であったように思われる。

そもそも、日本近代文学で独特の成熟を示した〈私小説〉という小説様式について、〈自叙伝〉との相違点は何か、記述された物語内容のすべてが〈真実〉であるのか、といった交換留学生からの疑問については、ある程度事前に予測可能であった。もちろん、〈私小説〉はあくまでもフィクションの側に属する様式であり、〈告白〉を偽装しつつも隠蔽したい事項については十分に隠蔽、抑圧することが可能な記述システムであること、また嘉村礒多のような短篇作家の場合、一定期間が経過した過去の出来事や、現在進行形の出来事を題材としつつ、断片的に自身の生活を虚構化する手法が選択されること、そのため、書き手自身の生涯を〈事実〉とし、ある安定した視点から統一的に俯瞰しつつ懐古する〈自叙伝〉とは、表現の位相がやはり異なっていることなどを、丁寧に解説していくことが欠かせないのだが。

とはいえ、このような文学研究の領域に含まれる問いについては、通常の日本人学生向けの専門科目講義と比較しても、さほど留意すべき点は変わらない。しかしながら、たとえば、日本近代における多くの知識層青年の動機となった〈立身出世〉志向、とりわけ小説「神前結婚」の主人公〈私〉が小説家を目指す一方で、両親は必ずしもそうした〈私〉の動機を肯定していないといった事情に顕著にあらわれる、近代日本社会で〈文学〉が配置された微妙なポジションについては、その背景を説明する十分な時間を確保しがたかったし、その文化的背景についての情報を十分に供給することも困難であった。移動の自由と鉄道網の整備が近代日本にもたらした、成功を目指して〈地方〉から〈東京〉へと一極集中的に〈上京〉し、東京で成功して故郷に帰還するという凱旋的〈帰省〉といった事象のニュアンスは、そもそも広大な国土と複数の大都市圏を持つアメリカ社会の事情とは比較しがたく、実感としてうまく留学生に把握させられなかったように思う。

ことに印象深かったのは、「神前結婚」の主人公〈私〉と前妻の間に生まれた男児〈松美〉が、実の母である前妻ではなく、〈私〉の両親が養育している事情が不可解であるという指摘で、筆者および英訳作成者にとって予想外であると同時に興味深かった。長男である〈私〉の男児〈松美〉が、その家系において家督相続者たりうるといった事情は、〈家〉の継承という概念がないアメリカ社会で主体形成してきた交換留学生にとって、なるほど承認しがたい事態であったことと思われる（ごく少数の限られた母集団ではあるが、本年度の受講者たちの意見の大勢は、この男児は母親と生活を同一とする方が自然であるというものだった）。

このような文学テキストのディテールからの視点は、たちどころに議論において、日本社会における長子相続を前提とした〈家制度〉、屋敷や田畑さらには墓所といったものが一体となって長男をその土地に束縛するような〈故郷〉の持つ磁場、さらにはこの小説「神前結婚」においてもはなはだ抑圧的に扱われて記述される〈ユキ〉というヒロイン像を通じて提起する〈男尊女卑〉的な日本社会の志向といった問題群を、連鎖的に呼び込んでくることになる。そしてこれらの問題群は、決して小説

「神前結婚」が執筆された同時代にとどまるものではなく、その退潮がやや見受けられるにせよ、「神前結婚」英訳を読んでいるその教室の現場に向けて、現在の日本社会および日本文化のある一面について、的確な具体性を伴いながら、その是非を含めて、突きつけている。

また今回の教室では、大きく問題として論じられることはなかったが、内縁関係を取り結びつつ演じられる〈私〉と〈ユキ〉の関係性、また必ずしも〈ユキ〉への愛情を強固に維持してはいない〈私〉の不道徳さなどが提起するであろう〈罪〉の意識に関わる論点や、〈私〉の父が息子のありようを近隣の村落共同体の住民の視線から隠そうとする〈恥〉の意識に関わる論点も、この小説は提示することになる。いささか現在では手垢にまみれた感も否めない日本文化論の古典的トピックではあるのだが、その一方でむしろ、交換留学生が日本文化論の入門書等で抽象概念として遭遇するであろう諸概念の具体的事例、といった程度の適切さを、今回選定した「神前結婚」という文学テキストが持ち合わせていたと考えた方がよいだろう。

さらには、今年度作成した「神前結婚」英訳には反映させていないのだが、日本文学における〈方言〉という問題も大きな課題として残された。主人公の〈私〉は標準語話者だが、主人公の老父母の発話はやまぐち方言によって記述されている。そして英語における〈方言〉は語彙や表現の位相ではなく、むしろ発音において顕著にあらわれるため、英訳テキストにおいてそれを効果的に変換することが困難であった。英訳作成担当者とともにこの問題は継続的に検討していきたいが、日本近代文学という領域に日本語を母語としつつ接している筆者にとっては、重要な再確認であった。

以上、駆け足ながら本年度の「やまぐちスタディーズ」において筆者が深く関与した部分について報告したが、中原中也と嘉村磯多についての文学散歩プログラムについても、筆者は授業担当者として同行しているので、その最も印象深かった点のみ、書き留めておきたい。中原中也についてのツアーでは、水無川とも呼称される吉敷川が最も強く筆者の心を捉えた。詩集『在りし日の歌』（1938〈昭和13〉年4月、創元社）所収の「一つのメルヘン」は、「秋の夜は、はるかかの彼方に、／小石ばかりの、河原があつて、／それに陽は、さらさらと／さらさらと射してゐるのであります。」（原文縦書）という一連から始まる、この詩集において最も知られた詩のひとつであるが、水が枯れて小石が蛇行しつつ羅列されている吉敷川の実際の光景は、この詩の情景が、詩人の視た幻影に限定されることのない、実体を伴うものであることを、ニューカマーとしてやまぐちに居住する筆者に思い知らせるものであり、大きく驚かざるを得なかった。

また嘉村磯多についてのツアーについては、「拝殿の鴨居の——旧在南山儀験神今遷干此、云云……寛文四年秋——と彫り込んだ掛額の前にぶら下つた鈴の緒を、てんでに振つて、鈴をヂヤランヂヤラン鳴らして拝殿に上り、正面の格子を開いて二畳の内陣に入つた。」と小説終盤で示される妙見社の掛額が、その末尾の年記は「明治癸卯秋 □宗熙倫翁」（1文字判読困難）と書き改められ、より時代の下つた墨書の掛額ながらも、たしかに同一の文言でひっそりと掲げられていたこと、および、現在も残る小説「神前結婚」の舞台となった嘉村磯多生家の間取りを実際に確認できたことを、ここに書き留めておきたい。

たとえば、小説の雑誌掲載を通知する葉書が配達された直後、家族が慌ただしく動転する場面の記述に、「向うに見える納屋の横側の下便所からユキが飛び出し、「父ちゃん、どうしたの」と消魂しく叫んで駆け寄つて来て台所に上ると」といった一節がある。教室ではどれほど考えても「納屋」「下便所」「台所」の位置関係は想像不可能だったのだが、現存する生家を訪問することで一目瞭然に理解することができた。いずれも小説の些細なディテールであり、また、そのことが決してテキストの解釈と深く関わることなどないのだが、そうした細部の発見こそが、文学散歩を行う小説読者の最も大きな喜びのひとつであることも、確かである。

（この項、加藤禎行）

## 5. 「やまぐちスタディーズ」の将来的課題

さて最後に「やまぐちスタディーズ」構想の将来的課題を整理しておきたい。

第1点目として、教育プログラム運営に関する予算確保の問題が挙げられる。今年度は、山口県立大学研究創作活動助成事業の助成金により外部講師を招聘することができ、同時に現代GP（課題名：やまぐち多世代交流・地域共生授業の展開—山口市の都市部と田園部におけるワークショップ型授業による団塊世代と若者の定住促進—）の助成金の恩恵により、文学散歩に関する交通移動経費を確保することができたが、こうしたプログラム運営の前提条件を、継続的に維持するための予算は検討を重ねていく必要がある。

第2点目として、担当教員及び通訳の負担の問題が挙げられる。本来、「日本文化論Ⅱb」は4名の担当者によるオムニバス形式で開講され、各担当者の負担は4コマ程度だが、今年度ような学外活動を含む授業運営においては、そのコマ数を大幅に超過する。また、それぞれの講義及び文学散歩の通訳は、1名で担当したため負担は甚大だ。これらの問題を解決するため、講義担当者については、講義2コマと文学散歩をセットと考えた方が効率的だろう。また通訳の場合は、嘉村儀多を教材としたパートで実施したような2週連続の1コマずつの講義と、別の日の文学散歩という運営方法よりも、中原中也の部分で実施したような1日2コマ連続の講義と別の日の文学散歩という運営方法が適しているかもしれない。日本人学生による通訳という案も考え得るが、今年度のような専門性の高い内容であれば、学生による通訳は、言語運用能力、文化背景についての予備知識といった点で困難であろう。

第3点目として、文学散歩のための時間、文化的背景を重点的に扱う授業時間の確保という問題が挙げられる。今年度は、後者については岩野の担当授業のシラバスを調整することで確保したが、次年度以降は検討が必要だ。それには新設科目の設定、または既存科目の微調整という選択肢があるが、後者の方がより現実的な対応であろう。しかし、どのような科目を利用するべきかについては議論が待たれる。文学散歩のための時間について、「日本文化論Ⅱb」の授業時間内、時間外のどちらで対応するのかを検討するべきだ。筆者は授業時間内として考えた方が効率的だと思われるが、「日本文化論Ⅱb」が扱うテーマ数（現在は日本近代文学を含め4テーマ）を減少させることも起こり得る。その場合、「日本文化論Ⅱb」の担当者全員での話し合いが必要となろう。

第4点目として、翻訳の困難という問題が挙げられる。文学テキストの翻訳においては、文学テキスト特有の表現、文化的かつ歴史的背景、および作家の伝記的事項に対する予備知識の必要性、文学テキストにおける方言の取り扱いなどの問題が挙げられる。文学テキストの翻訳は単なる言語的なものではなく、その作品における文化的および歴史的な背景などの研究も必要とされる。本年度の嘉村儀多「神前結婚」英訳においても、註釈の必要性は重視されており、30以上の文化的なコンテキストを補う註釈を施していたが、留学生からのいくつかの想定外の指摘は、文化の翻訳をめぐる困難さを改めて痛感させた。これは今後、本年度試行した日本近代文学の領域以外にも、この「やまぐちスタディーズ」構想を拡大・充実させていく過程で、おそらくすべての学問領域において見出されるであろう問題点であり、それぞれの担当スタッフが連携して研鑽しなくてはならない重要な問題点となるはずだ。

（この項、シャルコフ・ロバート）

（多文化教育／英語科教育法／日本近代文学）